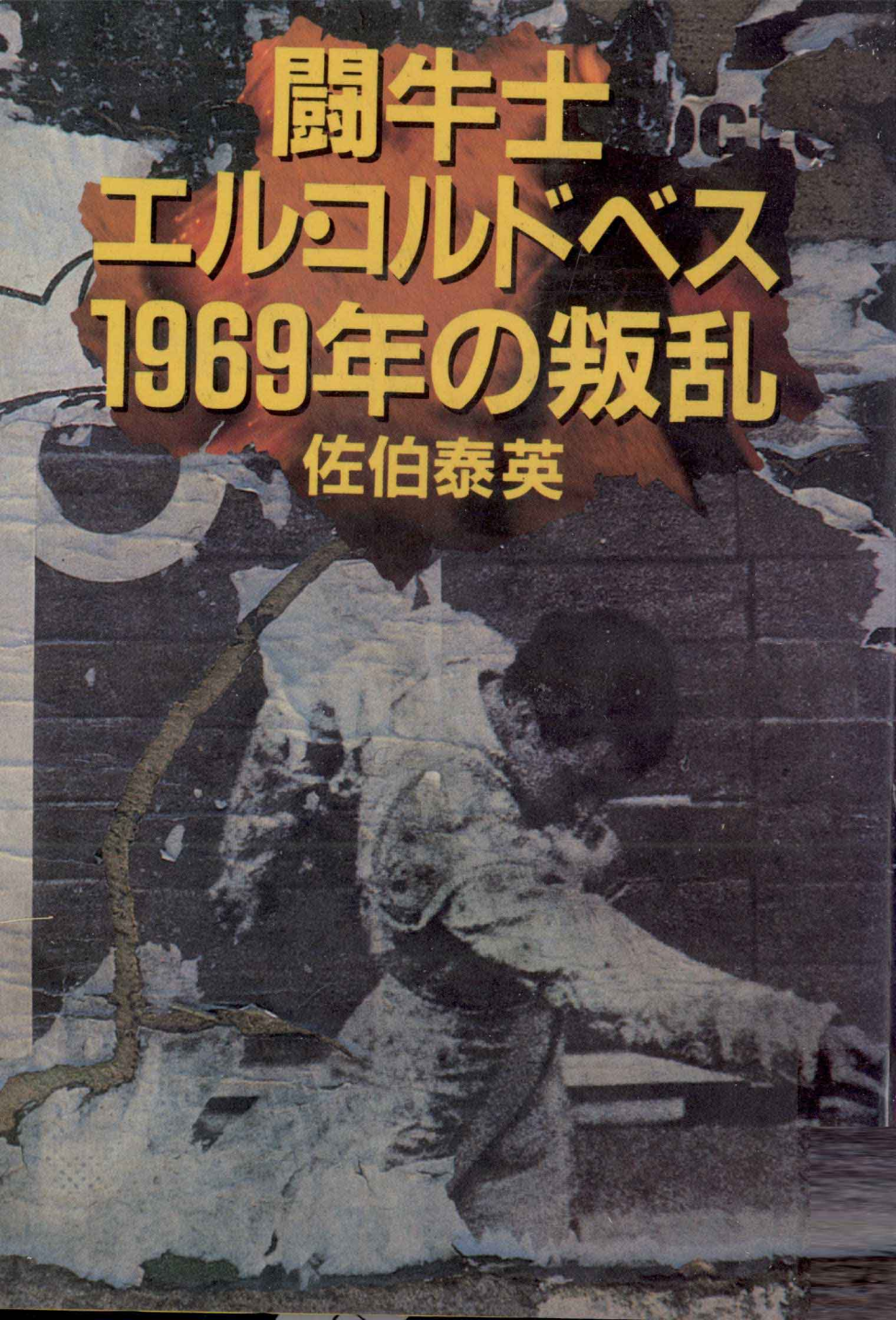
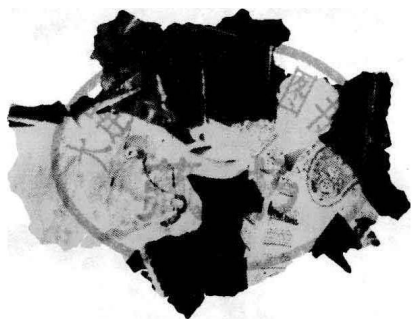


闘牛士 エル・コルドベス 1969年の叛乱

佐伯泰英



闘牛士 エル・コルドベス 1969年の叛乱



佐伯泰英

集英社

1942年 北九州市八幡区に生れる
1965年 日大芸術学部映画学科卒
1970年 スペインを旅行
1971年 家財道具を売り払い妻とスペインへ
1972年 本格的に闘牛取材を開始
1974年 帰国
1976年 「闘牛」刊行(平凡社)
1978年 「角よ故国へ沈め」(小川国夫氏と共著 平凡社)
1979年 「ウイスキー讃歌」(田村隆一氏と共著 平凡社)

闘牛士エル・コルドベス 1969年の叛乱

1981年 8月25日 第1刷発行

著者——佐伯泰英

装幀者——木幡朋介

発行者——堀内末男

発行所——株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10 〒101

電話——(03) 238~2842 (文芸出版部) 238~2781 (販売部)

印刷所——凸版印刷株式会社

定価——880円

©1981 TAIEI SAEKI, Printed in Japan

0095-772334-3041

検印禁止 落丁・乱丁本はお取り替えます

目 次

第一章 復活 11

第二章 コルドバ 35

第三章 英雄誕生 51

第四章 パンと闘牛 71

第五章 ふたつのスペイン 95

第六章 ふたりのゲリラ 115

第七章 変身 139

第八章 パロモ・リナレス 157

第九章 青春の終り 181

あとがき 201

第一回PLAYBOY

ドキュメント・ファイル大賞
最優秀作品賞受賞作



性と血、不安と驕り、聖と遊。
混濁としたイマージュ。それが闘牛

混然とした時の霧が流れていく。霧の晴れ間に宇宙が見えてくる。それが闘牛場。







宇宙の核は、たとえ夢想する男たち。それが闘牛士

闘牛士エル・コルドベス
一九六九年の叛乱

——よかろう。ヤツの呼名を変えてやろう
じゃないか。俺たち、バルマ・デル・リオ村
の友人たちは、闘牛士を「心優しき男」と呼
んできた。

が、俺たちをヤツの農場から放り出そうと
いうのなら、たつた今から昔通り、「にわと
り泥棒」、「けち野郎」と呼ぼうじゃないか。
それが相応というもんだ。

第一章 復活

一九八〇年九月七日、夕暮れ。

アンダルシアは、まだ夏の盛りであった。私はグラナダ郊外、ビスナール村からアルファカール村へ続く山道、通称「大司教の散歩道」に佇^{たなず}んでいた。アルファカール村フェンテ・グランデに水源をもつ疎水が「散歩道」沿いに、クネクネ蛇行して流れてゆく。アイナダマール疎水である。

山道の北側には、標高一五九九メートルのクエバ峰の岩山が連なり、斜面にはチヨロチヨロした松が生えている。南側の開けた谷は、オリーブの樹林である。

驢馬^{みうば}に乗った老人がやって来て、動物に水を呉れた。そして、老人も手のひらに、疎水の水をすくい幾度もうまそうに飲んだ。

「なにしていなさる？」

再び驢馬に跨^{また}がった老人が、尋ねた。

「詩人の殺されたところを捜しにきたんです。グラナダの詩人です」

「ああ、あれかい。ほれ、向こうに見える松林があるじゃろう、あそこさね」

松林のなかに、別荘風の建物が見える。私はそれが「かたつむり」という名前であることを知っていた。

「グラシアス（ありがとう）」

「なあと、神のご加護のあらんことを！」

老人と驢馬は、村へ去っていった。

先ほどから、通りすがりの三人の村人に、詩人フェデリーコ・ガルシア・ロルカの暗殺された地を尋ねた。誰もが、少しずつ違った場所を、言葉少なに教えてくれた。私はもうそこがどこであつても良いと、考えていた。

この谷のどこかで一九三六年八月十九日未明、詩人はファシストによって銃殺されたのだ。悪夢のはじまりであつた。

処刑されたのは詩人だけではなかった。

この谷から少し離れたブリアーナス村の初等学校の老校長ディオスコロ・ガリンド・ゴンサレスと、グラナダのいなか闘牛では少し名の知られた鋤付闘牛士のフランシスコ・ガラデー・メルガルとホアキン・アルゴリヤス・カベサス、そして詩人の四名であつた。足の不自由な老校長は、自ら信じる共和思想ゆえに死地におもむくことになった。アナキストで

あった二名の下級闘牛士は、内乱初期、ナシヨナリスト軍によって陥落させられたコルドバの奪還作戦中に、グラナダで逮捕された。詩人はその詩魂によって処刑された。「馬はすべて黒い／蹄鉄も黒い／マントのうえには／インクと蠟が光る／彼らは鉛の頭蓋骨を持っている……」

『ジプシー歌集——スペイン警察隊のロマンセ』の序である。この数節がファシストを刺激した。

この日以来、グラナダは一万六千余りの朝と夜を迎え、送ってきた。が、詩人暗殺の黒い宿罪は消えようとする。

陽がベガ（グラナダの沃野）に落ちた。闘の訪れる前の燃える空がベガを覆いつくした。

私は八年振りに復活した闘牛士とのインタビューの機会を待っていた。彼はコルドバに住んでいた。私は数年来の仕事、グラナダのアルハンブラ宮殿の撮影と並行して闘牛士に連絡をとり続けていた。が、コルドバからはなかなか「OK」の返事は来なかった。その闘牛士が生れたのは、詩人やバンデリエリジェーロたちが、この地に暗殺される三カ月程前のことであった。一九三六年に始まったスペイン内乱で、この国は多くのものを失ったのだ。

私はレンタカーのなかに用意してきたブランデーを思い出した。瓶ごとアイナダマル疎水の石橋に持ってきて封を切った。トクトクと、ブランデーの黄金色の液体を燃える水面に注ぎこんだ。清水と酒精とは一瞬のうちに混じり合い、夕焼け色に染まってベガに流れていっ

た。小さな声で銃殺された詩人の詩を呟いてみた

イグナシオが段を昇ってゆく

自分の死をそっくり背負って

夜明けを捜していたが

夜明けはなかった

.....

(「イグナシオ・サンチェス・メヒアスを神に歌ふ」
エデリコ・ガルシア・ロルカ全集 最直訳 牧神社)

あの未明、詩人たちも夜明けを捜していたが、夜明けは永遠にやってこなかった。

空が燃え尽きて、闇がやってきた。

グラナダのホテル、ワシントン・アービングに戻ると闘牛士のメッセージが私を待っていた。

ヴィアロビリオス農場に、明日午前十一時来られたし。マヌエル・ベニテス・エル・コルドベス。

闘牛士は庭先に出したサン・チェアーに横たわっていた。頭上にそよぐユーカリの木洩れ陽が闘牛士の体に快い日陰を作っている。目を閉じた皺くちやの顔には、うつすらと不精髭が伸びていた。牡牛の前で、一瞬の気の緩みもなく、時に欺瞞ぎまんの、時に恫喝どうかつの表情に変化する